

進捗状況報告シート

(2011年度・大学)

担当部局は ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

対象部局	産業研究所
大項目	0 理念・目的
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 自己点検・評価(2010.5.1～2011.4.30の進捗状況報告)

《目標・指標》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の評価を行っている。

進捗評価はA～Dの4段階とし自ら評価した。A～D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学内教員を核とした共同研究を常時3プロジェクト設置し、加えて毎年臨時的プロジェクトを1つ以上運営する。	→各研究プロジェクトの定例研究会のうち公開型を2回以上開催する。終了後1年以内に研究成果の公刊。	A	A			
2. 常時運営する3つの共同研究のテーマは、いずれも国際性、あるいは地域連携と結びついた内容とする。	→プロジェクトは国際性か社会連携性のあるテーマ設定とそれにふさわしいメンバー（学外者を必須）を編成。	A	A			
3. EUインスティテュート関西事業、EU情報センター活動、および日中経済シンポジウムを毎年運営する。	→産業研究所の運営するEUIJ関西シンポジウム、日中経済シンポジウムを毎年各1回以上開催。	A	A			
4. 産業研究所の共同研究活動の成果は、毎年出版物として公刊するのみでなく、講演会で教育活動や社会に還元する。	→学外公開型講演会・セミナーを年10回以上開催。東京での講演会を毎年開催し、首都圏での学術情報発信を行う。	B	A			
5. 経済・産業学術情報データベースを維持・更新して、研究者、学生に利用（検索）提供し、研究活動に寄与する。	→データベースに、毎年8千件以上の論文記事データの追加入力。	A	A			

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《現状の説明》 ※ 全小項目について記述が必要

小項目0.0.1	<p>0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。 (理念・目的の設定の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→→ <input checked="" type="radio"/> 理念・目的を設定している <input type="radio"/> 理念・目的を設定していない 産業研究所は、社会科学系の研究所として、学際的、実証的、総合的なアプローチによって、経済や産業などに関する現実的な課題の研究を行い、もって研究と現場の橋渡しの機能を果たし、社会に貢献することを使命とする。 (説明) 本学のめざす大学像のビジョンの1つに、「地域・産業界・国際社会との連携を強化する」がある。産業研究所は、そのビジョンを受けて、研究活動の立場から積極的に研究と現場(地域・産業界・国際社会)の橋渡しの機能を遂行し、現実的な課題の研究を行い、研究成果を社会への貢献する役割を担っている。(意見交換後、下線部挿入) 産業研究所が運営する3つの共同研究プロジェクト(『アジアにおける市場性と産業競争力』『日本の国際開発援助事業』『公共インフラの整備と地域振興政策の推進』2011.4.1.現在)は、いずれも理念・目的に合わせて正常に運営されており、テーマは国際性、社会連携性を持ったものである。これは本学の新基本構想のめざす大学像とも適っている。当年度は研究会自体が代表者の留学によりほぼ体会したアジア・プロジェクトの例外を除き、各プロジェクトで2回以上開催した。(意見交換後、削除)</p>
★小項目0.0.2	<p>0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。 (周知・公表の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→→→→ <input type="radio"/> 周知・公表している <input checked="" type="radio"/> 周知・公表していない (説明) 産業研究所はシンポジウム・講演会活動、研究成果などで、学内や学外へ存在を誇示している。一方、当研究所の理念・目的について、大学の各種のガイド類に付属機関の説明で略述されることはあるが、十分な記述とは言えない。現在、ガイド、ホームページを改訂・更新し、活動の規模に見合うよう理念・目的についても独自の広報を始めようとしている。ガイドについてはパンフレット型とし、2011年度秋学期に新版の配布を計画している。ホームページはその後に更新する。(意見交換後、下線部挿入)</p>
小項目0.0.3	<p>0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。 (検証の有無) いずれかにチェックしてください。 →→→→→→→→→→ <input checked="" type="radio"/> 検証している <input type="radio"/> 検証していない (説明) 産業研究所運営委員会で毎年事業報告を行い、各委員より広く意見を求めている。理念・目的の適切性についても、その際に運営委員から意見を吸収する。(意見交換後、下線部挿入) 産業研究所規程によって、所長は毎年学長へ事業報告を行っており、5年ごと学長から産業研究所事業の評価を受けることになっている。</p>
その他	<p>産業研究所は、学内の学部・研究科横断の共同研究活動を基礎にしている。その研究成果物である『産研叢書』は、過去10年間に2回表彰を受けている。近年は、EUIJ関西事業や日中経済シンポジウム、アジア総合開発計画シンポジウム、東京講演会など多彩な活動を展開しているが、それは小規模で迅速な意思決定ができる組織であることが大いに役立っている。</p>

《評価指標データ》

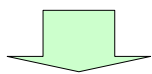
本学の育成した人材(卒業生)に対する社会(企業)の評価
 卒業生がどの程度スクールモットー(マスタリー・フォア・サービス)をどの意識しているか【基本的な基礎データ】
 卒業生のうち、自分の子供等、身内に関学への進学を勧めたいと思う人の比率【基本的な基礎データ】
 卒業生のうち、自分の子供等、身内に関学への進学を勧めたいと思う人で、「スクールモットーに共感できる」ことをその理由とする人の比率
 在学生のうち「この大学で人生の一時期を過ごすことが、将来にとって役立つと思う」人の比率
 理念の周知について(1)ー理念・教育目標を宣布する発行物・行事などの種類・数
 理念の周知について(2)ー総合コース「『関学』学」の履修者数

★ 追加データがあれば追加してください。

◎効果が上がっている事項 ※目標の進捗評価が「A」の場合は必ず記述してください。

《点検・評価(1)》効果が上がっている事項 注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。

小項目0.0.1	<p>EUIJ関西事業や日中経済シンポジウム事業以外にも、2011年2月17日にアジア総合開発計画シンポジウムを初めて開催し、関西経済界を主に110名参加の(意見交換後、下線部挿入) 盛況な(意見交換後、削除) 結果を得た。この国際シンポジウムについては、共催団体からの助成金や資金提供を得て本学の負担は少なく、関西経済連合会から施設の提供の便宜を受け、経済界との連携を強めた。またシンポジウム記録(Proceedings)もまとめ上げた。</p>
★小項目0.0.2	<p>共同研究の一環として、アジアやロシアの経済動向に関する公開型研究会、アジアへの国際援助事業をテーマにした公開型講演会を開催して、研究活動の国際性を高めている。学外団体からの援助を受けて、原子力事業の海外支援についての東京講演会を3月11日に開催したが、講演会途中で東日本大震災に遭遇し、中止せざるをえなくなったのは残念である。</p>
小項目0.0.3	<p>関西生産性本部から委託研究を受けて、「生産性向上と雇用問題」特設プロジェクトが2009年7月～2010年12月まで活動し、研究活動のプロセスで、シンポジウムを2回開催して関西経済界、社会との連携を強め、最後に研究成果物を刊行した。</p>
その他	<p>編集・出版について事務能力は高まっており、通常は、年1冊の『産研叢書』刊行だけだが、本年度はそれ以外に『生産性向上と雇用問題』『産業研究所75年の歩み』の合計3冊を刊行した。</p>



【次年度に向けた方策(1)】伸長させるための方策

注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。

小項目0.0.1	<p>産業研究所では、「アジアにおける市場性と産業競争力」や「日本の国際開発援助事業」の共同研究プロジェクトでの研究成果を蓄積しており、東アジア、ASEAN地域をテーマにした新しい機軸の学術情報発信で次のステップを目指す。</p>
★小項目0.0.2	<p>シンポジウム、講演会、出版などでの学外資金の獲得が、同時に研究活動の質を高めるバネになる。共催での便宜供与を含めて、学外団体との一層の協力関係の構築は必要である。</p>
小項目0.0.3	<p>会議記録(Proceedings)の作成は、成果報告の意味だけでなく、主催団体の信用度も高めるものであり、可能な限りまとめるようにする。</p>
その他	<p>図書を年間3冊を刊行できた実績からも、出版物を増やす努力は必要である。</p>

◎改善すべき事項 ※目標の進捗評価が「D」の場合は必ず記述してください。

【点検・評価】(2)改善すべき事項		注)出来るだけ内容を裏付ける客観的根拠を記述してください。
小項目0.0.1	産業研究所設立の母体となった経済学部、商学部以外の学部・研究科で、活動内容が浸透していない面がある。	
小項目0.0.2	産業研究所の理念、目的が広汎に周知されるためにも、産研ガイド、産研ホームページの改訂、更新が課題である。	
★小項目0.0.3	研究活動、特にシンポジウム・講演会、出版活動は従来よりも活発化したが、一方で図書資料業務の大学図書館移管の準備が立ち遅れた。	
その他		

↓

《次年度に向けた方策(2)》改善方策		注)出来るだけ手順や方法を明確にするなど行動計画を具体的に記述してください。
小項目0.0.1	従来あまり取り組んでこなかった分野、たとえば公共政策や社会福祉など、とりあえずはスポットの講演会でも、機会があれば立ち上げることが必要である。	
★小項目0.0.2	イベントの広報活動は、手際よくなっているが、学外団体の協力を取り付けるためにも、産業研究所自身の広報活動も必要である。	
小項目0.0.3	今後の産業研究所の調査研究情報の提供サービスについて、産業研究所のオリジナリティー色を高めて、提供情報が産業経済分野をはじめ、研究者に至便なものとの理解を広める必要がある。	
その他		

◎自由記述

【点検・評価】&【次年度に向けた方策】	
★その他 (自由記述)	国際シンポジウムや講演会、出版活動は今までの経験をもとに手際よく進められるようになってきている。共同研究活動も研究成果報告から学術情報発信にウエイトがおかれるようになってきている。産業研究所の活動も、いろいろな媒体を通じて、学術情報発信の「頻度を高める」とともに、「他機関のまねできない」独自性の確立の努力が重要である。

Ⅲ. 学内第三者評価

<評価専門委員会の評価>

- 全体的に、内容が「理念・目的」というよりも個別の研究プロジェクトの記述になっています。現状説明の小項目0.0.1では、理念・目的についての説明をしてください。「効果が上がっている項目」「改善すべき項目」の記述はそれぞれの小項目の観点に対応したものにしてください。
- 丁寧に、詳細に記述されています。
- 小項目0.0.1の現状説明は、(要素)の実績からみた適切性を採用されて記述されていると思いますが、この記述では、現在の3つのプロジェクトが理念・目的に沿っているという説明になります。過去の実績をみて理念・目的が適切であるかどうかという記述が必要ではないでしょうか。
- 小項目0.0.2の周知、公表については、昨年度から点検されたことが窺え、「・・・十分な記述とは言えない。現在、ガイド、ホームページを改訂・更新し、活動の規模に見合うよう理念・目的についても独自の広報を始めようとしている。」とのこと。活動に期待しますが、より具体的な記述が望ましいと思います。
- 「産業研究所設立の母体となった経済学部、商学部以外の学部・研究科で、活動内容が浸透していない面がある。」との認識は評価できます。大学全体の研究所であるので、他学部と産業界が結ばれている部分があると考えるので、そちらも調べてください。
- 小項目0.0.3は、理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているかを聞いています。本記述からはそれに応えていることが確認できません。
- 研究所の活動を記述する項目がなく、ご苦労いただいたと思いますが、活動状況は、「4. 教育研究組織」の4.0.1において、本学の独自の要素として(研究活動の状況)を設定しています。従って、小項目0.0.1(理念・目的の内容以外)、0.0.2及び0.0.3に記述されていることは小項目4.0.2及び4.0.3に記述してください。現状説明、効果があがっている事項、改善すべき事項、自由記述、また、設定されている目標・指標も同様です。
- 伸ばさせるための方策、改善方策が、効果が上がっている事項、改善すべき事項と繋がっていない、各事項の方策とは判断できない記述が見受けられます。
- 「盛況な結果」とありますが、それを示す開催日や人数を記載する必要があります。他の記述におけるシンポジウムでも同様です。昨年度の学内第三者評価のコメントでも同じ指摘をしています。
- 効果が上がっている事項、改善すべき事項に記述されていることは、現状説明において記述されることかと思えます。
- 目標の進捗評価がすべてAで確実な活動をされていることが伺えますが、単年度の目標が多く、中期的な目標を設定されることをお考えください。昨年度のコメントにも同じような指摘があります。

【大学基準協会：評価に際し留意すべき事項】

- 小項目0.0.1
基盤評価：「学部、学科または課程ごとに、大学院は研究科または専攻ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則またはこれに準ずる規則等に定めていること」「高等教育機関として大学が追求すべき目的を踏まえて、当該大学、学部・研究科の理念・目的を設定していること」
達成度評価：「建学の精神、目指すべき方向性や達成すべき成果等を明らかにし、当該大学、学部・研究科の理念・目的として適切である」
- 小項目0.0.2
基盤評価：「公的な刊行物、ホームページ等によって、教職員・学生、受験生を含む社会一般に対して、当該大学・学部・研究科の理念・目的を周知・公表していること」
達成度評価：「理念・目的の周知・公表に関する各種方策(周知・公表の有効性や方法の適切性等の定期的な検証・改善など)をとり、当該大学に対する理解向上につながっている」
- 小項目0.0.3
基盤評価：なし
達成度評価：「検証を実施する体制を整備し、責任を明確にするなどしたうえで、理念・目的の適切性について、恒常的かつ適切に検証を行っている」

IV. 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

★ 産業研究所は、研究活動を中心としているので、目標はどうしても現実的、具体的にならざるをえない。2010年度の産業研究所の活動は、2009年度に掲げた目標の指標を満たしているし、シンポジウム、セミナー等の開催件数、出版点数など定量的に前年度を越えている。その意味で、進捗評価のAは決して甘いものではない。